

宮崎県と福島県で採集されたトウガタガイ科貝類 3 種 – オオミカツキイトカケギリ, (新称) ヒノモトクチキレ, (新称) ソウマセトモノクチキレ –

三浦知之

〒 880-0035 宮崎市下北方町

Abstract

Three pyramidellid mollusk species, *Eulimella* cf. *padangensis* Thiele, 1925, *E. hinomotoensis* Nomura, 1938 and *E. clarae* Peñas & Rolán, 2016 were recorded from Miyazaki and Fukushima prefectures. The living specimens of the first species and soft parts were photographed. They are different chiefly in the shape of whorl edges.

はじめに

宮崎県と鹿児島県を含む日本の沿岸や海岸の底生生物の調査し、多様性の高いトウガタガイ科貝類などを報告している(三浦・三浦, 2025 など)。本稿では宮崎県と福島県で採集されたトウガタガイ科セトモノクチキレ属 3 種を報告する。本属は、高い塔形の殻をもち、成長線以外の彫刻や明瞭な螺旋状彫刻を欠くため、平滑な殻表面が特徴となる。また、軸壁も欠き、胎殻は 90° から 135° 傾くことが特徴で、世界の浅・深海域から多く知られ、200 種を超える。しかし、日本産種については不明な点も多い。

材料と方法

材料は、宮崎県の干潟・藻場および福島県相馬沖などの水深 125 m までの浅海域で採集した。得られた標本は船上で 10% 海水ホルマリンで固定するか、海岸から生きた状態で研究室に持ち帰って、可能な限り生体の軟体部を解剖顕微鏡下で観察した。必要に応じ、超音波洗浄機を用いて付着物を除き、70% Alcohol に保存して、殻の形

態を観察した。

トウガタガイ科 Pyramidellidae Gray, 1840

Turbonillinae Bronn, 1849

Eulimellini Saurin, 1958

セトモノクチキレ属 *Eulimella* Forbes & MacAndrew, 1846

オオミカツキイトカケギリ *Eulimella* cf. *padangensis* Thiele, 1925

(Fig. 1)

? *Eulimella padangensis* Thiele, 1925, p. 281, Taf. 15, fig. 11.

Eulimella (*Belonidium*) sp. 堀・土田, 1990, p. 92, pl. 1, figs. 5a, b.

オオミカツキイトカケギリ *Eulimella* sp. 三浦ほか, 2012, p. 57 & 59, fig. 7n.

?not *Eulimella philippinensis* Peñas & Rolán, 2016, p. 73–74. figs. 21, 24A–C.

採集記録 2009 年 7 月 4 日宮崎県門川町庵川東入り江アマモ場 (4); 2019 年 6 月 17 日同所東側水路 (1 + 1 死殻)。

形態・分布・生態 門川町から得られた最大の標本は、殻高 5.9 mm, 殻幅 1.2 mm であった (Fig. 1A)。いずれの標本も殻は細長く、非常に高い塔型となる。殻幅の増大率 (前層の殻幅に対する当該層の殻幅の比率) も最初の数層を除けば、いずれの螺層でも 1.1 倍程度である。胎殻は、2.5 階で、

Miura, T. 2025. Records on three pyramidellid mollusk species from Miyazaki and Fukushima prefectures—*Eulimella* cf. *padangensis* Thiele, 1925, *E. hinomotoensis* Nomura, 1938 and *E. clarae* Peñas & Rolán, 2016. *Nature of Kagoshima* 52: 25–28.

☑ TM: Shimokitakata-machi, Miyazaki 880-0035, Japan (e-mail: miurat@cc.miyazaki-u.ac.jp).

Received: 7 May 2025; published online: 9 May 2025; https://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK_052/052-007.pdf

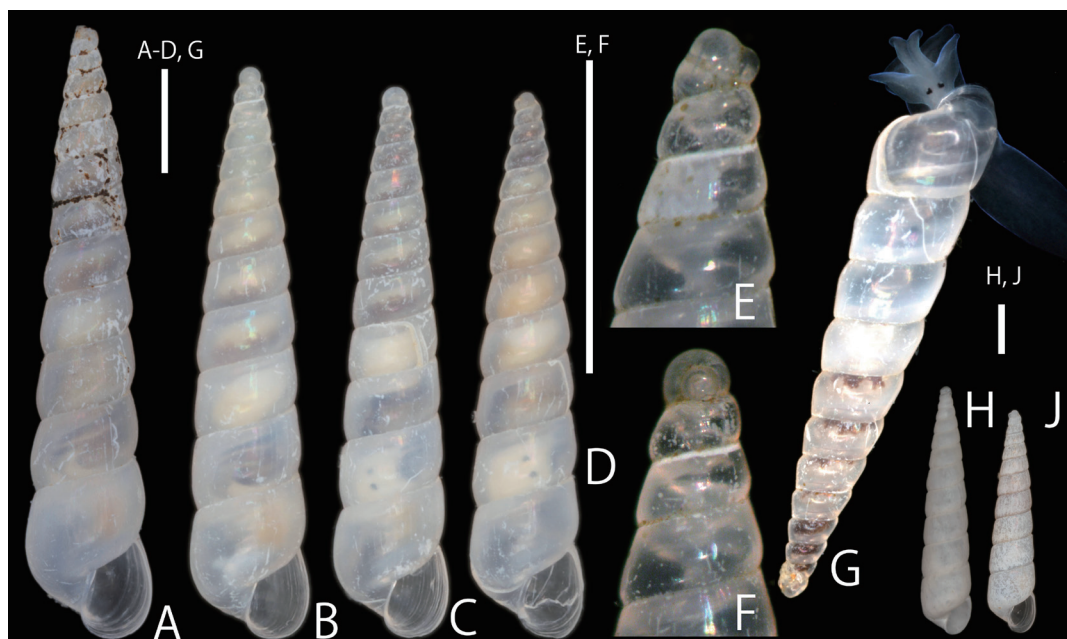


図1. オオミカヅキイトカケギリ *Eulimella* cf. *padangensis* Thiele, 1925: A-D. 2009年7月4日門川町庵川東入り江で採集した4個体、腹面；E & F. 同D個体の殻頂部；G. 同D個体の生時の様子；H & J. 2019年6月17日に同所東側水路で採集した個体。スケールは1 mmを示す。

Fig. 1. *Eulimella* cf. *padangensis* Thiele, 1925. A-D. Four specimens collected from Iorigawa inlet, on July 4, 2009, ventral view; E & F. Enlarged protoconch of specimen D, two different angles; G. Living state of specimen D, dorsal view; H & J. Two specimens collected on June 17, 2019, ventral view. Scales = 1 mm.

殻軸に対して90–100°異旋し、やや大きく、後生第1層よりは小さい (Figs. 1E, F)。大型個体では後生殻は螺層10–12階で、殻はやや薄く、透明感があり、白色半透明である。螺層には色帯も縦張肋もないため、極めて整った尖塔形の貝である (Figs. 1A–D)。初期層の側縁は螺層下端がやや膨らみ、下膨れになるが (Figs. 1A, Dで顕著)、個体によって異なり、直線的になることもあり (Figs. 1C, J)、体層に近づくにつれて丸みを帯びる。殻口は扇形で、直線的な内唇と殻底のラインが角張り、外唇は円弧状である。軸壁はない。

軟体部は白色半透明で、頭部触角は三角形で、前側がやや高く、先細で先端部は丸い。触角の付け根に丸い眼が1対あり、眼1–1.5個分程度離れて位置する (Fig. 1G)。多くのトウガタガイで見られる白色腺状の斑紋がほぼ見当たらないため、軟体部も透明感が高い。口吻基盤は細長く伸び、先端中央に浅い窪みがあり、左右に突出し、それぞれの先端は丸い。腹足は匍匐状態で左右に拡がり、両端には丸みがある。体層あるいは次体層に

は外套器官を思わせる彩色部分は確認できなかった (Fig. 1G)。

本種は、堀・土田 (1990) が山口県から記録した種と同じと思われる。セトモノクチキレ属は非常に多くの種を含み、殻表面の彫刻や色帯などが少ないことが特徴とされ、形態形質での分析が極めて難しい。Peñas & Rolán (2016) は東南アジアからオーストラリアにかけての太平洋の浅・深海域から92種を記録している。日本からも10種以上が報告されているが、一部を除くと詳細は不明である。また、そのほとんどは浅・深海域で採集され、海岸での採集はまれである。生息地の環境は不明であるが、トシカズクチキレ *Eulimella toshikazui* Hori & Fukuda, 1999 は、塔型で細長く、本種とも似るが、殻の側縁が直線的で、殻底に角があり、螺層側縁に丸みのあるオオミカヅキイトカケギリとは明瞭に区別される。他に細長い同属種は日本からは報告がない。形態だけなら、フィリピンなどから知られる *E. padangensis* Thiele, 1925 あるいは *E. philippinensis* Peñas & Rolán, 2016

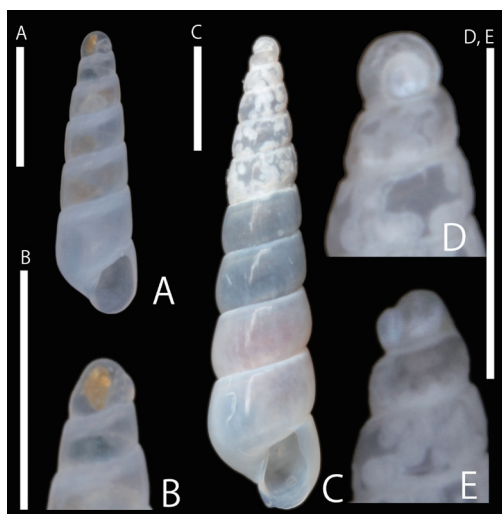


図 2. (新称) ヒノモトクチキレ *Eulimella hinomotoensis* Nomura, 1938. A. 2007 年 4 月 2 日日南市隅谷川河口で採集した個体; B. 同殻頂部; (新称) ソウマセトモノクチキレ *Eulimella clarae* Peñas & Rolán, 2016. C. 1981 年 11 月 30 日相馬市南東沖水深 125 m で採集された個体; D & E. 同個体の殻頂部. スケールは 1 mm を示す.

Fig. 2. *Eulimella hinomotoensis* Nomura, 1938. A. Specimen collected from River Mouth of the Sumitani, on April 2, 2007, ventral view; B. Enlarged protoconch of the same; *Eulimella clarae* Peñas & Rolán, 2016. C. Specimens collected from off Soma, 125 m deep on November 11, 1981; D & E. Enlarged protoconch of the same, two different angles. Scales = 1 mm.

が本種とよく似ている。Peñas & Rolán (2016) は殻幅に対する殻長の比 (前種が 4.2, 後種が 5.2) なども比較しているが、いずれも絶対的な相違点とはいえず、本種 (4.6–4.9) は、両種のほぼ中間的な値である。本種では原殻がやや小さく、傾きも大きいので、別種と判断された。

(新称) ヒノモトクチキレ *Eulimella hinomotoensis* Nomura, 1938
(Figs. 2A & B)

Eulimella hinomotoensis Nomura, 1938, p. 40, pl. 7, figs. 62a, b; Higo, Callomon & Goto, 2000, p. 118, fig. G4227.
not *Eulimella parvulissima* Peñas & Rolán, 2016, p. 145–146. figs. 6K, 40I–K.

採集記録 2007 年 4 月 2 日宮崎県日南市隅谷川河口 (1 死殻)。

形態・分布・生態 隅谷川河口から得られた標本は、殻高 2.4 mm, 殻幅 0.7 mm であった (Fig. 2A)。殻は細長く、塔型となる。殻幅の増大率 (前層の殻幅に対する当該層の殻幅の比率) も殻頂部を除けば、いずれの後生層でも 1.1 倍程度である。胎殻は、2.5 階で、殻軸に対して 90° 異旋し、第一後生層と同じ程度の大きさである (Figs. 2A, B)。後生殻は螺層 5 階で、殻は透明感があり、白色半透明である。螺層には色帯も縦張筋もないため、整った塔形の貝である。螺層側縁は直線的で、殻底だけが丸みを帯びる。殻口は扇形で、直線的な内唇と殻底のラインが角張り、外唇は円弧状である。軸壁はない。

本種は当初ミカヅキイトカケギリ *Turbonilla misella* Yokoyama, 1922 の可能性も考えたが、幼層に縦肋が一切見られないことおよび殻幅の増大率が小さいことから、ミカヅキイトカケギリとは区別される。円筒形に近い本種は *Eulimella hinomotoensis* Nomura, 1938 と同定された。水深 700 m 以深からの記録される *E. parvulissima* Peñas & Rolán, 2016 も概形は似ているが、別種と考えた。ヒノモトクチキレの原産地は Kamakura であるが、最近の記録はないものと思われる。ホロタイプを含む原記載にある 9 標本は殻頂部を欠き、原殻の記載はない。宮崎産の標本では、原殻について報告できた。

(新称) ソウマセトモノクチキレ *Eulimella clarae* Peñas & Rolán, 2016
(Figs. 2C–E)

Eulimella clarae Peñas & Rolán, 2016, p. 83, pl. figs. 3F & 26H–J.

採集記録 1981 年 11 月 30 日福島県相馬市南東 沖, KT-81-19 Station F-1-2, 37°39.8'N 141°24.6'E–37°41.1'N 141°25.3'E, 水深 125 m, 2 m Beam Trawl 付属採泥円筒ドレッジ (1)。

形態・分布・生態 相馬沖から得られた標本は、殻高 4.5 mm, 殻幅 1.1 mm であった (Fig. 2C)。殻は細長く、非常に高い塔型となる。殻幅の増大

率（前層の殻幅に対する当該層の殻幅の比率）も最初の数層を除けば、いずれの螺層でも 1.1–1.2 倍程度である。胎殻は、2.5 階で、殻軸に対して 90° 異旋し、第一後生層と同じ程度の大きさである（Figs. 2D, E）。後生殻は 9 階で、殻は内側がやや透けるほど薄く、脆く、白色半透明である。螺層には色帯も縦張筋もないため、極めて整った尖塔形の貝である。螺層の側縁は下膨れにはならないが、よく膨らむ。そのため、殻全体では縫合のくびれも良く目立つ。殻口は扇形で、直線的な内唇と殻底のラインが角張り、外唇は円弧状である。軸壁はない。

本種の概形と殻の薄さはガクバンゴウナ科の *Ebala* 属を思い起こさせるが、螺条など殻表面の彫刻が一切ないため、セトモノクチキレ属の 1 種で、概形が類似して各螺層が膨らむ *Eulimella clarae* Peñas & Rolán, 2016 と同定した。本種は New Caledonia および Solomon 諸島の水深 96–109 m から知られているため、地理的にも離れており、別種である可能性もあるが、本報では、他種とも一致がみられなかったため、暫定的にこの種と同定した。

本稿で紹介した 3 種は細長い塔型の概形がよく似ているが、外殻の透明度、螺層の膨らみ方、縫合の窪みと側縁の形状に明らかな違いが確認できる。ヒノモトクチキレは沿岸から浅海に出現頻度が高そうであるが、生体を確認できていないので、詳細な生息場所などは不明である。オオミカヅキイトカケギリは生体がアマモ場に出現し、10 年後にも記録されているので、山口県での記録（堀・土田, 1990）と同様に他所にも生息していると思われる。一例を挙げると、成ヶ島探見の会（2023）の図 108F は下膨れぎみの螺層とほぼ直角に立つ胎殻が目立ち、本種と思われる。ただし、殻表面の彫刻もない本属では、標本形態の詳細な確認と遺伝子の分析も同定に必要と思われる、ここではその可能性だけを記す。ソウマセトモノクチ

キレは日本の浅海産既知種であるユウヤククチキレ *Eulimella eulimoides* (Nomura, 1936) やダイリセキクチキレ *E. marmorea* Hori & Tsuchida, 1996 とは容易に区別できる。未だに日本周辺海域の知見が少ないため、暫定的な同定とせざるを得なかったが、今後の研究調査に期待したい。

引用文献

- Adams, A. 1861. On some additional new species of Pyramidellidae from the islands of Japan. *Annals and Magazine of Natural History*. ser. 3, 7: 41–47.
- Forbes E. & R. M. Andrew. 1846. Notes on some new and rare animals observed during cruises in the British seas, since the last meeting. *The Athenaeum: Journal of Literature, Science, the Fine Arts*. 3052: 1027.
- 堀 成夫・土田英治. 1990. 山口県立博物館所蔵のトウガタガイ科貝類の再検討 (2). *ちりばたん*, 20 (4): 90–94.
- 成ヶ島探見の会. 2023. 「由良湾・成ヶ島周辺の貝類 (2022 改定版)」. 奥井印刷. 南あわじ, 6+14+35 p., 178 pls.
- 三浦知之・三浦 要・富岡 宏・佐伯めぐみ・三橋利恵. 2012. 宮崎県門川町庵川アマモ場とその周辺に出現する貝類, 甲殻類および腕足類. 宮崎大学農学部研究報告. 58: 51–68.
- 三浦知之・三浦 渚. 2025. 宮崎県庵川東入り江および他の浅海域で採集されたトウガタガイ科貝類 2 種 – スジイリクリムシクチキレおよびクリイロヒダクチキレ – *Nature of Kagoshima*. 52: 21–23.
- Nomura, S. 1936. Pyramidellidae from Siogama Bay, northeast Honshu, Japan. *Saito Ho-on Kai Museum Research Bulletins*, (10): 1–108, pl. 1–12.
- Nomura, S. 1938. The third report on Pyramidellidae based upon the specimens preserved in the collection of the Saito Ho-on Kai Museum. *Saito Ho-on Kai Museum Research Bulletins*, (16): 1–88, pl. 1–15.
- Peñas A. & E. Rolán. 2016. Deep water Pyramidelloidea from the central and South Pacific. 3. The tribes Eulimellini and Synchronini. *Universidade de Santiago de Compostela*. 304 pp.
- Saurin, E. 1958. Pyramidellidae de Pho-Hai (Sud Viêt-Nam). *Annales Faculté des Sciences (Saigon)*. 1958: 63–86, pl. 1–4.
- Thiele, J. 1925. Gastropoden der Deutschen Tiefsee-Expedition. II Teil. *Wissenschaftliche Ergebnisse der Deutschen Tiefsee-Expedition auf dem Dampfer "Valdivia" 1898–1899*. 17(2): 35–382, pls 13–46.
- WoRMS. 2025. <<http://www.marinespecies.org>> (accessed 2025.3.25)
- Yokoyama, M. 1922. Mollusca from the Upper Musashino of Kazusa and Shimosa. *Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo*, 44: 1–200+viii, pls. 1–17.